

農業生物学から農学へ——時代を駆け抜けた明峯哲夫さんを追悼して

中島紀一（有機農業技術会議事務局長）

1. 農業生物学者明峯哲夫さんの逝去

2014 年 9 月 15 日に明峯哲夫さん（農業生物学研究室主宰）が急逝された。享年 68 歳だった。

明峯さんが理事長を務めていた NPO 法人有機農業技術会議では、NPO 法人秀明自然農法ネットワーク（SNN）からの要請を受けて、2013 年度から自然農法技術の実態解明と改善方策の提言のために「秀明自然農法調査研究委員会」を組織し調査研究活動を進めている。明峯さんはそのリーダーとして尽力され、8 月 4 日から 8 日まで北海道で開催された現地検討交流会には講師として参加し、8 月 22 日からは熊本での現地検討交流会への参加も予定していた。ところが、21 日の朝に、体調に異変が生じ、直ちに入院となり、検査結果は、末期の食道ガンで、すでに各所に転移しており、治療のすべもないということだった。そしてそのまま家に帰ることさえかなわず逝去された。

明峯さんは、1946 年東京生まれで、1964 年に北海道大学に入学し、65 年に農学部農業生物学科に進学する。学部卒業後、大学院に進んだが 72 年に大学院博士課程 2 年で中途退学し、同志の三浦和彦さんらとともに農の道に踏み出した。まず、よつ葉牛乳運動のリーダーだった岡田米雄氏の世話で、栃木県河内町（現在は宇都宮市）の河内養鶏場で山岸式農業養鶏法を学び、74 年に茨城県八郷町（現在は石岡市）にたまごの会八郷農場を消費者自給農場として設立する。81 年に東京都国立市に移り、市民耕作に取り組む「やば耕作団」を立ち上げている。その後も逝去に至るまで「農業生物学研究室主宰」を主な肩書きとし、常に野にあって鋭い論説を世に放ち続けてきた。在野の実践的農学者として時代を駆け抜けた一生だった。

明峯さんは有機農業推進法が作られた 2006 年頃から日本有機農業学会の機関誌等にも鋭い農業論、農学論の論考を寄稿されるようになった。次はその主なリストである。

「鳥インフルエンザといのちの循環」

有機農業研究年報第 6 巻 特集 いのち育む有機農業 25～43 コモンズ 2006

「低投入・安定型の栽培へ」

有機農業研究年報第 7 巻 特集 有機農業の技術開発の課題 36～51 コモンズ 2007

「健康な作物を育てる——植物栽培の原理——」

中島紀一・金子美登・西村和雄編著『有機農業の技術と考え方』86～118 コモンズ 2010

「農学論の革新——有機農業推進の立場から——」

有機農業研究 第 2 巻第 1 号 3～10 日本有機農業学会 2010

書評「モントゴメリー著『土の文明史』築地書館 2010」

有機農業研究 第 2 巻第 2 号 52～53 日本有機農業学会 2010

明峯さんの論説で際だっている点は、農業生物学を立脚点とした見識の確実さと鋭さ、常に時代状況全体を見据えた視野の広さ、農業者そして生活者の視点からの地に着いた総合的実践性、農業の各地での多様で長い歩み踏まえた歴史観などであろう。明峯さんの業績全体についての詳しい論評は、2015年9月を目途に刊行が準備されている著作集『命（いのち）を紡ぐ農の技術（わざ）』（仮題）の解題に譲り、この稿では、明峯さんが最期に渾身の力を注いで取り組んだ農業技術論の集成に関して、その時期に身近にあって歩みを共にした友人として、追悼の気持ちを込めて少し述べることにしたい。

2. 植物生育の原理——植物が植物を育てる

明峯さんが逝去の間際まで取り組んだ最後の仕事は自然農法の技術原理の解明だった。秀明自然農法の技術原則の一つに「無施肥」がある。この技術原則はかねてから「低投入・持続型農業」を提唱してきた明峯さんの考えにおおよそ合致するものだったが、この技術課題に真摯に取り組んでいる生産者との出会いと交流の中で、彼はより本格的にその技術論的解明に取り組む気持ちになっていた。

明峯さんは亡くなる少し前の8月29日に次のように口述している。

「肥料を与えなくても作物は育つということは、旧来の農学、旧来の農業のイメージからすれば、ありえないということになるわけです。しかし、彼らの実際の姿を見ていると、もちろんそれが全てうまくいっているわけではなし、やはり肥料を入れないということが土の力や作物の力を損なっていくということは、多々あるわけですが、しかし、時と場合によっては、植物は、栄養をやらなくても育つという現実を目の当たりにすることができました。

これは、大げさに言えば、ある種のカルチャーショックだったと僕は思っています。

つまり植物というのは、施肥が必要だということに凝り固まっている立場から言えば、必ずしもそうでもない、施肥しなくとも植物は育つという現実は大きなカルチャーショックだと思います。

まあ、とはいえ、やはり施肥をしないということは、地力を損ねていく、地力の維持を困難にするということは、僕たちが想像するように問題になるわけですが、しかし、ある条件が満たされれば、施肥をしなくとも結構植物は育つ可能性がどうもあるという感触を得たことになるわけですね。

果たして植物は、肥料を与えなくても育つだろうかということですね。

育つとすれば、どういうそれは理屈なのか。おそらく旧来の植物生理、あるいは、作物学、農学の既成概念を大きく壊すことになると思うんです。どういうことが起きているのかとこのことの解明が、なされなければなりません。これまでの農学、生物学、あるいは植物学は、植物に肥料を与えるということを前提にして、さまざまなことが行われてきましたので、肥料を与えないということは考えられなかったわけです。肥料を与えなくても育つかどうかなどという発想はそもそも出てこなかった。そういう実験も満足に行われてこなかった。そういうデータもなかったと考えられます。まさに目からウロコの状態に僕たちは今直面しているということだと思います。」

これが明峯さんの最後の切迫した問題意識だった。

明峯さんはこの間を自らに突きつけながら、2014年5月末から8月初めまでの2ヶ月余に5回にわたる連続講演をしている。

- 5月31日 秀明自然農法農学セミナー第1回 植物生育の原理——植物が植物を育てる
- 6月30日 秀明自然農法農学セミナー第2回 低投入・持続型農業の作物栽培論
- 7月31日 秀明自然農法農学セミナー第3回 植物の環境への適応
——「連作・自家採種」を考える
- 8月6日 秀明自然農法技術交流検討会 in せたな 北海道農業へのラブコール
- 6月7日 有機農業技術会議・有機農業技術原論研究会 農業生物学を志して

明峯さんはこの一連の講演を基にして農業技術論の新著を書き下ろす心づもりでいた。しかし、突然の病魔はそれを許さなかった。その現実を知った明峯さんは、病室に三浦和彦さん、永田まさゆきさん、大江正章さん、そして私を招いて、これらの講演を踏まえた新著の取りまとめを託された。この遺志に基づいて刊行されたのが明峯哲夫著『有機農業・自然農法の技術——農業生物学者からの提言』（コモンズ刊、2015年2月）である。遺著全5章には、明峯さんの最後の考えが縦横に展開されている。なかでもその核心は第1章「植物生育の原理」だろう。副題は「植物が植物を育てる」となっている。この章では、植物を育てるのは肥料でもなければ微生物でもない、植物こそが植物を育てるのだという明峯さんの農業生物学者としての独自の見解が、「無施肥農業」は農業の本道としてあるという視点から、詳しく述べられている。なかでも地球史、生物進化史の視点からの解明は圧巻である。

同書では、第1章の解説を三浦和彦さんが書いている。三浦さんは北大時代からの明峯さんの同志で、農業微生物学を専門とされるやはり在野の農学者である。明峯さんの語りは三浦さんの解説でさらに深められ、見事な同志的対話となっている。以下にその全文を引用しておきたい。

「著者は本章のキーとなるテーマを以下の3点であると述べている。

- ① 植物は自然に育つ
- ② 植物を育てるのは植物だ
- ③ 土壌中の有機炭素蓄積が作物生育の鍵である

つまり持続的な農業の形態においては里山の木や草を大切に活かすことが前提であり、逆にそれをなおざりにすると、土壌は痩せてしまうことを農業生産の基礎原理として述べ、土壌の衰退は農業文明の衰退をもたらしたことを思い起こしている（「1 農業の歴史」）。自然において可能であるこの原理は、植物群落の遷移という過程で目に見える姿を現している（「2 遷移」）。

そして、陸上での植物の生活を前提に作物栽培を論じる。作物生理の基礎となるのは光合成による自立したエネルギー獲得能力である（「3 植物体の成長の仕組み」）。

この能力の起源は、まだ海の中の微生物のような存在であった初期の生命の段階に始まった出来事であった。光合成細菌類そしてシアノバクテリアなどによる太陽光を活用した独立栄養による生理の確立であった。しかも、その生理学的な成果と相前後して、初期生命であった細菌類のあるものたちは利用しにくい不活性な窒素をアンモニアに変換する窒素

固定能力も獲得していく。これらを受け継いだ生物たちが陸上に進出した時には、自ら光合成する能力を持った植物は、窒素固定能を持った土壤微生物たちと共存し、またカビ類の菌根菌類などとも共生しながら、栄養条件を改善しうる存在となっていた（「4 進化論から見た植物の光合成と微生物の窒素固定」）。

植物たちがなす群落は、貧栄養な地においても定着し、さらにたくましく、たゆまぬ生活活動を通じて生活域を広げてゆき、陸上を広く森の緑が覆う植生をつくりあげたのだ。このような論述を通じて、まさに「植物は自然に育つ」ということの進化的な仕組みがわかりやすく説明されている。

植物の能力を、作物栽培における土壤栄養と光合成能力との関係で理解するには、「5 窒素固定と光合成の共役」の項目において、水田がなぜ生産力の高い土壤を生み出すのかを解き明かしている点が重要である。森が涵養した水は水田に流れ入り、窒素固定菌などを養い、作物としての植物が育つという仕組みが理解されるのだ。

そこで著者は、この作物の生かされている「環境」は、実は植物自身が生み出し支えている構造を持ったものであることを強調する。「植物は自己触媒的に植物を育てている」と論じているのである。土壤の豊かさは土壤生物相の豊かさであるが、土壤生物相が豊かであるのは土壤生物たちの成長を可能にしている豊かな栄養を供給している植物の成長があるからだ。とりわけ、たつぷりと植物起源の有機物の供給があればこそ土壤生物は豊かに増殖・活動して土壤を豊かにし、作物がよく育つというのが「6 有機炭素の意義」における指摘ある。

これは明治以降1世紀以上にわたって我が国においても指導原理となっていた施肥理論への根底的なアンティテーゼ（反指針、対論）であり、とくに、自然農法家が実践的に体験してきた農耕地における原理を科学の目で明快に解き明かした。

著者は「7 農業の原理」において、すでに挙げた論点を敷衍して、自然生態系には土壤炭素のストックという原理的に大切な特質があり、それに反して農耕はこの炭素ストックを消耗する過程なので、有機炭素の還元作業は農業技術の根幹であると主張する。化学的施肥技術は栄養学的には合理的かもしれないけれど、土壤生物学的には原理的に誤っており、施肥などにおいて低投入な持続的栽培管理法が望ましい。この低投入な農法は理論的な帰結でもあるけれども、施業法としても展開可能な見通しを持っており、そのことは土壤バイオマスの「蓄える技術」化と「引き出す技術」化との論議をとおして展望されている。

こうして「自然の摂理」は単なる予定調和的なイデオロギー（思想）であるのではなく、耕作理論として、農業技術であることが可能となることを解き明かしているのである。（三浦和彦）

3. 低投入・持続型農業の理論的解明——環境応答力を軸として

三浦さんがこのように解説した明峯さんの今回の新しい組み立ての学説の展開は、恐らくこの連続講演が企画された2014年3月頃からの明峯さんの突き詰めた考察のなかで固められたのだろう。

だが当然のことながら、それは、その時だけの思いつきではなく、これまでの明峯さんの所論の延長としてある。2007年に『有機農業研究年報第7巻』に寄稿された「低投入・安

定型の栽培へ」は、この問題についての明峯さんの早い時期のすぐれた考察だった。重要な問題提起なので、長くなるが主な論点を引用したい。

「長い間慣行農法を実践してきた農地を有機農業に転換する場合、初期にはそれ相応の量の有機物を投入しなければならない。地力が絶対的に失われているからだ。しかし、5年、10年と堆肥投入を続け、適切な輪作を実施し続ければ、農地は熟畑化するはずだ。一定量の腐植が土壌中に蓄積し、それが地力となる。土壌の団粒化が促進され、通気性のよい、そして水はけがよく、しかも水もちのよい土壌となる。しかも、土壌微生物相は多様化し、各種微生物相の相互規制の網は複雑化する。特定の病原微生物だけが増殖する事態は抑制される。熟畑とは土壌が緩衝作用をもつようになった状態だ。緩衝作用とは、土壌自身の力で土壌の状態を一定の状態に維持できることである。」

「植物に与える物量は、可能な限り少ないほうがよい。植物はそのような環境下では、自らの環境適応能力を最大限喚起し、手持ちのカードをフルに活用して生き抜いていく。植物の成育の高い自立性こそ、健全な植物生産を保障する。」

「植物の生き方には手数（カード）がたくさん準備されている。そして、与えられた環境にふさわしい生き方を、つまりその手数のなかから最良のものを選び取っていく。植物の形態や生理は与えられた環境に対応し、融通無碍に変化していく。与えられた環境に応じて、自らの姿をそれにふさわしいものへとしなやかに変身させていく能力。これを『環境応答能力』と呼ぶことにする。この能力こそ、植物の生きる基本原理だ。」

「現代の工業的栽培技術は、植物を物量で攻め立てる。栄養分が必要なら、大量の化学肥料を投与する。水が必要なら、地下水が枯れるまで水を与え続ける。土を柔らかくすることがよいとなれば、大型機械を駆使し、徹底して耕起する。病虫害や雑草を防ぐとなれば、膨大な毒物を環境にばら撒き、クリーニングする。過剰な物量を駆使して整備された”最適環境”では、そこで育つ植物は数ある生き方のうち特定の（とにかく生産性をあげるといふ）カードしか使用できない。」

「光合成で合成されたブドウ糖をめぐり、植物体内には二つの代謝系が存在する。

一つは、ブドウ糖を多数結合させ、デンプンやセルロースなどの多糖類を合成する系。成長中の若い植物では細胞壁の主成分であるセルロース合成が優先され、生殖成長に入った植物では種実などに蓄積されるデンプンの合成が盛んになる。

もう一つは、タンパク質合成である。ブドウ糖はいったん有機酸に分解され、有機酸は根から取り込んだ窒素（アンモニア）を取り込み、アミノ酸となる。アミノ酸が多数結合すると、タンパク質が合成される。

窒素分が過剰だと、ブドウ糖の代謝はタンパク質合成系に傾く。その結果、成育中の植物ではセルロースの合成が滞り、細胞壁の発達が抑制され、細胞の、ひいては植物体全体の頑丈さが失われる。過剰な窒素分の投与は植物を軟弱にさせ、結果として病虫害への抵抗性が低下する。」

「現代の栽培技術は、植物を単なる物質系とみなしている。しかも、植物に与える物量を増やせば、それが高い収穫量として戻ってくるという、素朴な機械論である。」

「植物は単なる物質系ではない。植物は同時に情報系でもある。植物が外界から取り入れるのは物量、つまり物質だけでなはない。植物は環境から情報も取り入れている。たとえば、根が栄養分を取り込む場合、栄養分という物質とともに、環境に存在する栄養分の

量・質に関する情報も取り込んでいる。その情報をシグナルとして読み込み、植物は適切な環境応答をしようとしているのである。」

また、2010年に『有機農業研究』に寄稿された「農学論の革新——有機農業推進の立場から——」でも、関連して次のように論じている。

「近代農業は作物や家畜から奪い尽くし、与え尽くす。その結果作物や家畜の「自活する力」を損ない、生命力を弱体化させ、結果として農業生産としての永続性を失っていく。このような近代農業とは対照的に、作物や家畜を物質循環の輪の中に位置付け、その周囲に群がる多様な生き物との相互作用の中で、彼らの生命力を切磋琢磨しようとするのが有機農業だ。作物や家畜が潜在的に持つ”自活する力”は生の環境との相互作用の中で喚起されるはずだからだ。その力を信頼するところから有機農業は出発する。作物や家畜が健康に生き抜いていくには、”害虫”や”病原菌”や”雑草”の存在が必要なのである。」

「植物には周囲の環境に合わせ、生理や形態を融通無碍に変化させていく能力がある。この環境応答能力が、植物の自立した生活の根拠となっている。”不安定”で”不満足”な環境で生きる植物ほどこの力は強く喚起される。逆に植物が安定し、満ち足りた”最適環境”に閉じ込められると、この力は萎縮する。植物は与えられて生きる存在ではなく、自ら得ようとする存在だ。

人間の都合により”改良”されてきた作物にもこの環境応答能力は温存されている。作物も基本的には植物である。だから作物に対して人間が与えるものはできるだけ少ないことが望ましい。周囲の生の環境を過剰に損なわないよう、人手、機械力（耕すなど）、物資（肥料や水など）、資材の投入量をできるだけ少なくする。そのような低投入を原理とする農業は、物量にものを言わす近代農業とは対照的である。」

「有機農業はシステムとして理解されなければならない。システムとは農業生態系と言っても良い。そのシステムの中で物質が循環し、その循環が作物の自立的な生を保障する。物質がうまく循環するためには、システムの要素ができるだけ多様でなければならない。したがって有機農業の持続的農業としての完成度は、以下三つのポイントで評価できるだろう。

① 土地利用の仕方

庭地／畑地／水田／果樹園／草地／樹林地……などの土地を有機的に繋げることで、物質循環の輪をどれだけ完結させるか。

② 作物の時間的・空間的組み合わせ

輪作／間作／混作……、二毛作、二期作……、草生栽培／アグロフォレストリー／コンパニオンプランツ……、などの工夫により、どれだけ地力を維持し、どれだけ多様な生産物を手に入れているか。

③ 家畜の役割

物質循環を複雑にさせ、生産物をより豊富化する家畜（反芻家畜／非反芻家畜）をどのように活用しているか。」

4. 明峯さんの方法論——農業生物学的原理主義

先に全文を引用した明峯さんの新著第1章についての三浦さんの解説に関してだが、ここでも書いたように、この解説は明峯さんの所論を実にわかりやすく解説している。しか

し、詳細に読んでみると明峯さんと三浦さんのこの問題へのアプローチの仕方は微妙に異なっていることにも気付かされる。たとえば明峯さんは、地球生物史における植物の主導性を強調するが、三浦さんは微生物と動植物の協働性、共生性に強く注目している。明峯さんはあくまでも作物（植物）生理学的原理の解明を目指しているが、三浦さんは、地球史を地球誌として捉え、生態史、生態誌的視点から問題にアプローチしている。これはかなり重要な方法論的違いである。

明峯さんの農業生物学の核心は「植物の環境応答力」であり、動かない植物には環境に適応して融通無碍に生理や形態を変化させていく力があり、農業は生き物のそうした能力に依拠して発見され、展開してきたというのが明峯さんの所論だ。だがその結果、どのような自然が作られてきたのかについては、必ずしも明示的には語られていない。

事柄は地球的規模での歴史的なものであり、歴史の特質はその一回性にあり、そこにそれぞれの場に生きる生き物にとっては動かしがたい構造が、自然の枠組みとして立ち現れることになる。三浦さんは、生き物はそうした固有の生態的な環境の中で、多様なつながりをつくりながら生きていくと論じ、だから明峯さんの「融通無碍」に対して「しがらみの連関性」のようなことをしっかりと見つめる必要があると主張される。

明峯さんの「低投入・持続型農業」という提起に関しては、有機農業学会や有機農業技術会議での調査研究や論議を踏まえて、中島は主として本田廣一さん（興農ファーム）と語らいつつ、明峯さんも主要な執筆者として加わった『有機農業の技術と考え方』において「成熟期有機農業」というステージ概念を設定し、そこでほぼ共通して確認できる技術のキーワードとして「低投入・内部循環・自然共生」を提起した。この中島の提起に明峯さんはおおむね了解されたが、なお中島の整理には原理的概念の詰めが弱いと感じておられたようで、今回の遺著での学説の展開は、中島の「低投入・内部循環・自然共生」論へのいわば対論の意味も込められていたように思われる。

ここで明峯さんのいわば作物（植物）生理学的原理主義と三浦さんの生態学的関係主義、そして中島の経験主義的な農業実態論アプローチの、3つの異なった方法論からの問題提起がはしなくも鼎立した。この3つの論は、互いに少しずつ違っているが、おそらくいずれもそれなりに正しく、かつ相互に補完し合い、その向こうに本格的な農業論構築への展望が見えてきているように思われる。そのほかにも別の有効なアプローチもあり得るだろうが、この三者三論の鼎立は、それとして実に本質的で意味が深い。

5. 農業生物学から農学へ

明峯さんは有機農業という言葉を意識して避けてきた。若い頃の論説でも「有畜複合農業」という言葉は積極的に使っているが、有機農業という言葉はほとんど使っていない。それは有機農業と言う概念設定によって問題のあり方がズレていってしまうという強い違和感があったからのようだ。

時代の中で厳しく問われていることは、農業のあり方であって、別言すれば「工業モデルに対峙する農業モデル」であって、農業を本来のそのような営みとして取り戻していく取り組みだと主張される。「有機農業運動がまさに有機農業運動という狭い領域に自らを押し込め、反権力的センスを去勢させていこうとしている現状」という批判が1979年の手記の末尾に記されている。

こうした明峯さんが有機農業技術会議の理事長に推挙されたとき（2011年6月）の彼の苦笑いが思い出される。

問うべきは有機農業という特殊なタイプの農業ではなく、農業そのものであり、社会の、さらに言えば暮らしのあり方なのだというのが明峯さんの最初から一貫した主張だった。まったく同感である。明峯さんは、農業が本来の活力に満ちていた時代として昭和30年代に注目し、各地に族生していた民間農法等の技術運動の掘り起こしを提唱されていたが、それはそうした問題意識からだった。

そして私たちの議論をそのように深め展開していくためには、前節で述べた三論の鼎立はかなり有効ではないかと考えられるのだ。

遺著の第5章とそれに基づく鼎談で繰り返し述べているように、明峯さんの最初の志は「農業生物学」の探究であり、それが彼のアイデンティティであり、それは彼の疾風のような人生を貫いていた。遺著は明峯さんのそうした農業生物学の歩みの到達点である。しかし、それを読んでみれば明らかなように、明峯さんの所論は、もうすでに農業生物学という枠を超えて農学という一般的あり方へと広がり、深まってきた。彼は、農業生物学を求めてようやく農学へ到達したという自らの最後のあり方にある種の満足を覚えていたに違いない。

明峯哲夫主要著作

- 『有機農業・自然農法の技術——農業生物学者からの提言』2015年、コモンズ
- 『原発事故と農の復興——避難すればそれですむのか』（共著）2013年、コモンズ
- 『有機農業の技術と考え方』（共著）2010年、コモンズ
- 『街人たちの楽農宣言』（共編著）1996年、コモンズ
- 『都市の再生と農の力』1992年、学陽書房
- 『ぼく達は、なぜ街で耕すか』1990年、風濤社
- 『やば耕作団』1985年、風濤社

三浦和彦さん遺稿『草を資源とする』

<編集後記>

中島紀一（秀明自然農法調査研究委員会委員長・有機農業技術会議代表理事）

本冊子の著者である三浦和彦さんは 2015 年 10 月 10 日に急逝されました。本冊子執筆の最終段階のことでした。そうした事情のため本冊子は、三浦さんが遺された草稿をもとに中島が遺志にそって取りまとめたものです。

三浦さんは、秀明自然農法の調査研究を進めるなかで出会った生産者のみなさんの真摯な姿に感銘し、農業生物学、土壤生態学の視点から、ぜひ、「草を活かした自然農法原理の解明と技術提案」を取りまとめたいと考えておられました。生産者を聞き手としたセミナーでの 2 回の講演を踏まえてこの冊子を刊行する計画は 2014 年夏の頃には合意されていました。

2014 年 9 月に無二の盟友である明峯哲夫さんが亡くなり、その遺著『有機農業・自然農法の技術』刊行のために遺稿整理をするなかで、明峯さんがそこで提示された作物生理学的な視点からの自然農法技術論だけでなく、土壤生態学の視点からの自然農法技術論の提起がぜひ必要で、その二つが並立することではじめて自然農法技術論の全体像が見えてくるのだという思いが三浦さんのなかで定まっていたようでした。

しかし、その執筆はなかなか進みませんでした。2015 年の春頃には、すでに体調がかなり不調となっていたこともその一つの理由だったように思えます。しかし、それ以上に、生産者のさまざまな文字通り懸命な取り組みを踏まえて、そうした場でしっかりとした指針となるような理論を打ち立てること、明峯さんの渾身の遺著にならぶような水準の新しい理論的境地を切り拓くこと、それは容易なことではなかったのだと思います。

もう入院と退院を繰り返えされるようになってしまっていた 9 月 18 日に三浦さんからお電話をいただきました。これが私が三浦さんとお話しできた最後でした。肺機能が極度に低下していて、他人と話をすることはすでにかなり辛くなっていたようでしたが、その時は驚くような勢いで、とても興奮したお話ぶりで 20 分ほどの長話となりました。

「やつと僕らしい生態学的な新しい技術理論が見えてきた。落葉や枯れ草が堆積したリター層にカビの菌糸が伸びていく、その菌糸が絡み合い食い込んだ落葉や枯れ草を土壤動物が嚙っていく、そこに議論の核心があるんだ。そのことに僕はやつとはっきりと気がついた。それを君に伝えたかった」というのがお電話の趣旨でした。その時に聞かせていただいた新展開の論旨が、そのまま今回の冊子の内容となっています。

三浦さんのパソコンに遺された最期のノートは 9 月 25 日が最終更新のようでした。ご逝去の少し前のことです。ご遺族からそのノートを提供いただき、開いてみると、本冊子の最初に掲載したテーゼ群が記されていました。何度も書き直した痕跡も残されていました。それぞれのテーゼに関しての解説も書き記されていました。

それらを読んで、三浦さんの理論家としての素晴らしさに強い感銘を受けました。実践的農学について、前人未踏の領域を三浦さんは切り拓かれたのだと強く感じました。三浦さんは最期の力を振り絞って知の跳躍を果たされたのです。三浦さん、よくここまで成し遂げて

くれた、ほんとうにありがとう。それが彼のノートを読んだときの私の感想でした。

三浦さんも明峯さんも秀明自然農法研究のなかで、知性を輝かせつつ天に召されました。尊く美しい生き方だったと感銘します。

お二人の遺志を引き継いで、お二人の言葉を思い起こしつつ、バトンを引き継いだ私たちの、新しい遠くへの歩みをともに始めたいと思います。

三浦さんの歩みを綴った冊子『農への道を生きて —— 三浦和彦メモリアル』を刊行しました。ご希望の方にはお頒けしますので有機農業技術会議事務局までご連絡下さい。

315-0157 石岡市上曽 291-2 有機農業技術会議

090-1845-1016 (飯塚) yuki-gijutsu@lime.ocn.ne.jp